アンチョビピッツァ

キツナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アンチョビこと安斎千代美と共に整備士としてアンツィオ高校にスカウトされた少年はこれまでの三年間を振り返る。

そして、これからのお話。

目次

戦車、壊れた後 ―― 1
せめて、整備士らしく ―― 6
ペパロニ、植え込みのむこうに ―― 11
アンチョビピッツァ、誕生 ―― 16
瞬間、後輩、重ねて ―― 22
チハたんごころを、君に ―― 29
おまけ
まほ、来校（前編） ―― 36
まほ、来校（後編） ―― 41
チヨ、心の向こうに ―― 50
見知らぬ、部屋 ―― 59

戦車、壊れた後

「ＣＶ３３はとりあえずお終い、っと」

俺は手に持ったレンチを軽く宙へ投げてパシッと音を立ててキャッチする。

今日の試合で走行不能状態になったＣＶ３３達を走行可能状態にまで修理し、ガレージ内にずらりと並ぶ復活したＣＶ３３を眺める。

ＣＶ３３はイギリスのカーデンロイド豆戦車をベースにイタリアにおいて設計・製造された豆戦車だ。全長３ｍちょっと、武装は８ｍｍ機銃が二丁、装甲厚は最大１４ｍｍと言うなんとも可愛い戦車だ。小さい車体から繰り出されるすばしっこい動き、軽い車体を生かしたゾンビ戦法を用いて試合を戦った。しかし、８ｍｍ機銃では残念ながら火力不足と言わざるを得ないだろう。

『Ｐ４０フラッグ車、走行不能！　大洗女子学園の勝利！』

その放送がまた頭の中で繰り返し、繰り返し、繰り返し鳴り響き始めた。ＣＶ３３の修理をしている間は集中していたため気にならなかったが、一度手を止めてしまうと再びそのことを意識してしまう。

第六十三回戦車道全国大会、第二回戦において我らが母校の戦車道チームは大洗女子学園に敗北した。

この試合でＣＶ３３達は元気に走り回り、機銃で敵戦車をチクチクと攻撃していた。しかし、ＣＶ３３達の機銃では敵戦車を行動不能に追い込むことは出来ない。仕方のない事とは言え、悲しい事実だ。

対戦相手とは試合後に一緒に食事をとり、お互いの健闘を称え合ったし、俺達の思いは大洗の戦車道チームに託した。

吹っ切ったつもりだった。が、案外引きずっているようだ。

隊長であるアイツは『現状では二回戦まで行ければ上等であり、一度でも勝利することで後輩たちに自信を付けさせる』という事を目標に据えていたみたいだ。

今年の大会で一回戦を突破できたという事実は後輩たちにとってとてもいい経験であり、俺達三年生が卒業した後でもやって行けるようにという心積もりなのだろう。

俺としては例え難しくても優勝……とまでは言わないが準優勝、ベスト４まで行って欲しいと考えていた。
俺とアイツで頑張って来た三年間がこの大会を持って終わりだという事を考えると……なんとも物悲しい。
「……セモベンテとＰ４０は明日でいいか。戦車達(この子)もこんな気持ちで車体(からだ)に触ってほしくないだろうしな」
そうと決めたら手に持っていた工具を腰に巻いていたポーチに収めた後に、腰からポーチを外す。身軽になった所でＣＶ３３の横に敷いてあるシートの上に寝転がる。手を組んで頭の後ろに回して枕にすることで固い地面に直接頭が接することを防ぐ。環境的には決して寝心地が良い場所ではないが、この場所で横になると心が休まるような気がする。
寝転がった俺が見る景色は戦車をしまうガレージの天井だけだ。この三年間で戦車の修理や整備が一段落すると今みたいに寝転がり、寝転がるたびに何度も見た天井だ。そんな天井を眺めて居ると色々なことを思いだす。
練習の後の戦車の整備のこと、練習試合の後の戦車の修理のこと、新しく買った戦車の調整のこと、特に意味もなく個人的に戦車を弄り回したこと。
「なんだ、まだ残ってたのか」
そんなことをつらつらと考えながら天井をぼんやりと眺めて居ると、今まで見ていた一面天井の景色がある人物の顔に変わった。それは高校に入ってからは親の顔よりも見た人物の顔である。どうやら彼女は仰向けになっている俺の傍に立ち、俺の顔を覗き込んでいるみたいだ。彼女は腰に手を当て、さらに腰を九十度以上曲げて顔を近づけている。
「へっ、へぇあっ……」
「ん？」
「へっくしおおおおぉぉぉぃ!!」
「う〝わ〝ぁ！　汚いな！」
俺の顔を覗き込んだ彼女のドリルツインテールは重力に従い垂れ

下がり、その毛先が俺の敏感な鼻を刺激してくれたものだからくしゃみがでるのは仕方がない。
　唾と鼻水が若干彼女の顔に飛んだ気もするが、所謂コラテラルダメージと言うヤツだ。何のための被害かは知らないが。
「やあ、チヨ」
「私の事はアンチョビと呼べ。またはドゥーチェ」
　彼女の名前は安斎千代美。隊員達からは畏敬の念と親しみを込めてドゥーチェやアンチョビと呼ばれている。俺は隊員達の前では彼女のことをドゥーチェと呼んで言るが、彼女と二人きりの時はチヨと呼んでいる。
　そして、これは俺達が二人きりのときにいつもやるお約束のような物だ。いつものお約束なのだが、さっきまで色々なことを思いだしていた俺は彼女はいつから自分のことをアンチョビと呼ぶようにと、言うようになったのかも思いだした。
「ふふ……」
「何を笑っているんだ？」
「いやなに、前はアンチョビって呼ばれることを嫌がってたのに、今じゃあ自分で呼ばせてるって思うと……なんかおかしくてな」
「なっ！　お前が始めたことじゃないか！」
「まあまあ、これやるから御気を沈めたまえ。ドゥーチェ」
　俺は寝そべった状態のままつなぎのポケットに手を入れ、チョコレートを取り出す。取り出したチョコレートは学校の購買で売っている、イタリアでとても有名なチョコレートだ。高校に見学に来た人が買っていくお土産としても評判が高い。
　そいつをチヨに手渡す。
「ふん……まあ、許してやろう……って、これ溶けてるじゃないか！」
「ずっとポケットに入れてたからなぁ」
　季節は夏ではないものの、だんだんと暖かくなってきている。それに加えてガレージという熱のこもる場所でずっと作業していたのだから、ポケットの中のチョコレートが溶けるのは必然か。
「なんだかんだ言いながら食べてるじゃないか」

「折角貰ったんだしな。それに、チョコは溶けても美味い」
　チヨはそう言いながら包み紙に残った溶けたチョコレートを舐めて最後まで味わっている様子。その行動は女の子としてどうかと思うぞ、俺は。
「そう言えば、チヨは何か用事でもあったのか？」
「あー、まあ……なんだ。どうせお前は根詰めて作業しているだろうから、息抜きに誘いにな。外の空気でも吸わないか？　この時間だと夜風が涼しくて気持ちいいぞ」
　ＣＶ３３の修理をしているうちにいつの間にか夜になっていたようだ。ガレージに時計はあるが全く見てなかったし、外の様子は見えなかったから全く気が付かなかった。
　それに色々考えてしまい戦車の修理に身が入らなくなって来たところだ。チヨの誘いに乗るのも良いだろう。
「そうだな。自販機で飲み物で買ってから散歩に出も行くか」
「うむ。ご馳走様」
　はいはい。わかってますよ。

☆

　俺達は俺がおごった缶の紅茶を飲みながら学園の敷地内を散歩していた。ある程度歩くと学園の観光名所『スペイン階段風階段』が見えてくる。さっきまでやっていた戦車の修理に加えて、少々歩いたために若干の疲労感を感じ始めた俺はスペイン階段風階段に腰かけて休憩することを提案した。
「……」
「……」
　散歩をしているときもそうだったが、階段に座って休憩しているときも俺とチヨの間に会話は無い。俺もチヨもどちらも話を切り出すことは無かった。
　しかし、この沈黙の時間に苦痛は感じないし、静かに二人で過ごす時間というものは心が落ち着く。

この程度で気まずくなる程彼女との付き合いは短くないのだ。
彼女が前に立って、俺は彼女を支える。
高校三年間ずっとそうやって来た。
これからもずっとそれが続いて行くように錯覚していた。しかし、今日の大会を以て、それが終わろうとしている。
そうやって思うと自然と彼女との出会い、高校生活の始まりの記憶が思い浮んで来た。

せめて、整備士らしく

アンツィオ高校とは、栃木県に所在する高等学校である。しかし、栃木県は海無し県であるため、静岡県の清水港を母港としている。そのため静岡県、愛知県出身の生徒は少なくない。

学生たちは、後先考えずにノリと勢いで陽気に目前の人生を謳歌する傾向にあり、入学時は真面目でも、いつのまにやらアンツィオの空気に染まってしまう恐怖の伝染性を秘めている。

食事と宴会に全力を尽くすイタリア人気質でもあり、食事の質は極めて高い。

アンツィオ高校の特徴を簡単に並べてみるとこんなところだろうか。

そんなアンツィオ高校の学園長室に俺、学園長、そして薄緑色の髪を後ろで三つ編みにして、大きめのメガネを掛けた少女が居る。

「以前も言ったが、君達二人にはアンツィオ高校の戦車道チームを立て直して欲しい。必要なものがあるならその都度伝えてください。要望にはできるだけ答えることを約束しましょう。あ、お金が掛かることはちょっと難しいという事は分かってくださいね。それでは、これからよろしくお願いします。安斎千代美さん。膝井工太郎（ひざいこうたろう）さん」

「はい」

「はい」

俺が今年から通うことになる高校、アンツィオ高校の学園長が俺と俺の隣に居る少女に向けて語り掛け、俺と少女はそれに答えるように返事をする。

「ま、後は若い二人でよろしくやって下さい。今日はこれで解散です」

学園長よ、その言い方は色々と含みがあるように聞こえるから問題があると思う。

学園長はそれだけ言うと席を立ち、学園長室から出て行った。

ところで話は変わるが、俺は今の今までずーっと我慢してきていたのだ。

原因は隣に立っている一人の少女。

学園長が彼女の紹介をするよりも前に、彼女が部屋に入ってきた瞬間に俺は彼女が何者か分かった。
話しかけたかったが、さっきまでは学園長の話を聞いていたので自重していた。しかし、その学園長ももう居ない！
もう我慢できないぞ！
「安斎さん！　安斎千代美さん！」
「は、はい!?」
俺の突然の呼びかけに安斎さんは驚いたように返事をする。いや、彼女のメガネの向こう側にある瞳が僅かに見開かれていることから実際に驚いたのだろう。
「去年の戦車道大会中学生の部の試合見ました！　安斎さんの指揮するチームの戦術はいつも奇抜で、見ていてとても興奮します！　それに戦車の動きから隊員たちの隊長である安斎さんに対する尊敬、信頼、親愛の念が感じられるみたいで、あなたがとても優秀な隊長であることがよーくわかりました！」
「え？　あ、はあ……。ありがとうございます？」
彼女の名前は安斎千代美。
中学生時代に彼女が率いた戦車道チームは決して強力な戦車を揃えていたわけではないにもかかわらず大会で非常に優秀な成績を残した。
戦車道において、人間の能力に加えて戦車の性能という物は試合を左右する大きな要因となる。言ってしまえば強い戦車を揃えたチームはとても強いのだ。また、人間を育てるよりお金を出して強い戦車を買いそろえる方が圧倒的に楽であるという事も大きいだろう。
だが、安斎さんは戦車の性能ではなく、人間の能力をフルに活用することで厳しいと思われた試合に勝って来たのだ。もちろん、その勝利は隊員一人一人の努力の賜物であるのは事実だが、その隊員を率いた安斎さんの隊長としての能力がピカイチであるのもまた事実である。
そのことを知り、彼女の有能さに目を付けたアンツィオ高校の学園長はアンツィオ高校の戦車道チームを立て直すために直々にスカウ

トしたのだ。
彼女の見た目は三つ編み、眼鏡。戦車に関係が無い場所で彼女のことを見れば十人中十人が物静かな文学少女であると断じるだろう。
しかし、彼女が一度戦車に乗り込み、隊の先頭に立てば見事な策を弄じ、彼女を信頼する部下達と共に手ごわい相手を倒していく戦乙女となるのだ。
「あ、失礼しました。さっき学園長が言っていましたが、俺の名前は膝井工太郎です。これから三年間一緒に頑張りましょう！」
「は、はい。安斎千代美です。こちらこそよろしくお願いします」
オロオロした安斎さんを見ると自分が興奮し過ぎていたことに気が付き、冷静になり自己紹介をする。しかし、自己紹介をしていく内に再びテンションが上がってきてしまったみたいだ。
俺は安斎さんの手を握りブンブンと振る。
俺の怒涛の畳みかけに安斎さんは目を白黒とさせている。
「買い直した方がましってレベルじゃない限り、戦車ならどんな戦車でも直す自信があるよ！　どんだけ戦車を壊しても心配しないでください！」
安斎さんが戦車道チームを引っ張る隊長としてスカウトされたのなら、俺は戦車道チームを戦車の整備の面から手助けを行うためにスカウトされたのだ。
俺は戦車道が好きだ。
戦車を動かす可憐な女性達が好きだ。
だが、それ以上に戦車が大好きだ！
幼いころから戦車という武骨な鉄の塊は何故か俺の心を惹いて止まなかった。軽戦車も中戦車も重戦車も駆逐戦車も自走砲も豆戦車もみんな大好きだ。
そんな俺が戦車を整備出来るようになりたいと思うようになるまでそう時間は掛からなかった。
かつて熊本に住んでいた時、近所のおじさんが凄腕の整備士という話を聞いた俺は彼に頼みこんで弟子にしてもらった。俺はおじさんのことを師匠と呼び、小学一年から六年までの六年間ほぼ毎日師匠の

家を訪れては戦車の整備の仕方を教えてもらった。
教えてもらったことは戦車の整備だけではなく、戦車ごとの特徴や性格、整備をする時の心構えやちょっとしたコツから気難しい女性を口説き落とす方法まで。師匠には本当に色々なことを教わったものだ。
小学校を卒業するころには師匠から整備士としてのお墨付きを貰うことが出来た。技術の面ではまだまだ未熟な部分も多々あったが、知識の面では師匠も感心するほどだったことは密かな自慢である。
中学入学と同時に俺は親の仕事の関係で熊本から愛知へと引っ越すことになった。師匠が戦車整備の神様と呼ばれるようなすごい人だという事を知ったのは愛知に引っ越して来てからだった。
愛知では近くに師匠のような人は残念ながら居なかったため、戦車道チームを有する中学校や地元のクラブに自分の整備の腕を示したうえでお願いすることで戦車の整備をさせてもらった。
最初は近所のチームの戦車の整備のみを行っていたのだが、いつの間にか遠方まで俺の整備の腕が伝わったようで色々な学校やチームから整備や修理の依頼が来るようになった。
それはとてもありがたいことだった。何故なら俺は戦車を弄れるだけで幸せだったのだから。
そうして中学三年間を過ごしているとアンツィオ高校の学園長の目に留まり、アンツィオ高校戦車道チームの整備士としてスカウトされたのだ。
「これからアンツィオの戦車道を盛り上げて行こう！　おー！」
「おー？」
俺の振りあげた手に釣られるようにして安斎さんも拳を天に突き出した。

俺と安斎さんで現在履修者数名の戦車道チームをどれだけ立ち直らせることが出来るのか。正直全く想像がつかないし、もしかしたら何もすることが出来ずに三年間を過ごしてしまうかもしれない。

いずれは履修者の数は数十人……も集まらないかもしれない。
いずれは強い戦車も、弱い戦車も、早い戦車も、遅い戦車も、そんな様々な戦車を有する……ことは出来ないかもしれない。
だけど、人がたくさん集まれば、安斎さんがみんなを束ねてみんなが安斎さんを支える様な良いチームが出来るという事は何故だか容易に想像が出来た。
それに、例え人が集まらなかったとしても、少なくとも俺は安斎さんのために戦車を直そう。安斎さんのために戦車を整備することが出来たら、それはそれはとても幸せなことだろう。
だって、俺は彼女の一ファンなのだから。

ペパロニ、植え込みのむこうに

空を見上げると日本の街中では中々見ることが出来ない満点の星空が見ることが出来る。海を行く学園艦は周りの空気が澄んでいるため、数多くの星が見られるのだ。

俺は学園艦から見る星空が結構好きだったりする。そのため、夜に外出すると気が付いたら上を向いていることが多い。そんな俺に釣られてか、チヨも星空を眺めているようだ。

横目でチヨのことをちらと見ると、何やら物思いに耽っているようだ。彼女はあの星空を見ながら何を考えているのだろう？

そんなこんなしていると、スペイン階段風階段に腰かけて一休みし始めてから十分くらい経っただろうか。俺もチヨも持ってきた飲み物はすでに飲み干してしまっている。

「そろそろ行くか」

「……あ、うん……。そうだな」

季節的に暖かくなって来たとは言え、夜風は結構涼しい。夜風に当たり続けて俺もチヨも風邪を引くというのは面白くは無い。二人とも飲み物は飲み干して良い頃合いだと思った俺はチヨに戻ろうと呼びかける。

チヨは思いのほか真剣に考えこんでいたようで、俺の呼びかけに少し遅れてから答える。

「コータローは……す……んん〟っ……今、何を考えていたんだ？」

チヨは俺達が二人だけの時にする呼び方で俺に話しかけてきた。

どうやらチヨも俺が夜空を眺めながら物思いに耽っていたことに気が付いていたようだ。

「チヨに初めて会った時のことだよ。昔は大人しい女の子だったのにどうしてこうなったのかなぁ……ってね」

「なっ！　な〟〜に〟〜!?　それはどういう意味だ！」

俺が生暖かい目を向けながらチヨにそう言うと、俺の言葉が心外だったのか声を大きくした。

三年前のチヨは引っ込み思案と言うほどではないが、どちらかと言

うと物静かな、本当に文学少女然とした少女だった。しかし、アンツィオ高校と言う学び舎で一年、二年と過ごすうちに彼女もその例に漏れずノリと勢いで陽気に人生を過ごす少女へと変わっていった。
　さっきまでプンスカといった感じに怒っていたチヨであったが、今度は一転して何やら不安そうな表情をしてこちらに聞いてい来た。
「その……コータローは前の私の方が良かったか？」
「ん？　まあ、文学少女系チヨも良かったけど、ドゥーチェ系チヨの方が俺は好きかな」
「そうか！　そうかそうか……」
　チヨは「そうか！」でパッと笑顔になって、「そうかそうか……」の所で腕を組んでしみじみと頷いている。
　チヨは自分の今の方向性が間違っていないことを俺と言う他人から聞くことが出来て嬉しかったみたいだ。
『ドゥーチェ』という役職はアンツィオ高校の戦車道チームにおいてとても重要な位置づけだ。そんなドゥーチェという役割を担ってきたチヨにとって、自分がやって来たことは間違ってはいなかったという確信が欲しかったのだろう。
「ほら、ゴミ捨てて来てやるよ」
「うん、ありがとう」
　俺はチヨから空になった缶を受け取り、一番近くに置いてあるゴミ箱の方へ向かう。
　ゴミ箱に缶を投げ込み、チヨの所に戻ろうとした俺は近くの植え込みの陰に見知った人物の頭部を見つけた。
「ペパロニ、こんなところで何やってんだ」
「うぇ!?　に、にーさん……」
　俺のことを『にーさん』と呼んで慕ってくれるその人物は、俺とチヨの可愛い後輩の一人であるペパロニだった。
　ペパロニはツンツンと跳ねたくせっ毛に黒髪ショートヘアーで、もみあげを一房だけ伸ばして三つ編みにしているのが特徴的な少女だ。元気な子が多いアンツィオ高校の中でもとりわけムードメーカー的な立ち位置の活発な少女である。

念のため言っておくが、彼女の言う『にーさん』とは血縁関係を匂わす表現ではなく、年上の人物に対する表現である。
彼女ににーさんと呼ばれるところをクラスメイトの男子に見られた俺が男どもに取り囲まれたのは今になっても良くない思い出だ。
「えーっと、えーと……。コ、コンタクトをこの辺に落としまして……」
「お前、この間裸眼で3．0ってこと自慢してたじゃねーか」
「あっ！　うぅ……」
「コータロー、何かあったのか？　ん？　ペパロニじゃないか」
俺が誰かと話していることに気が付いたチヨもこちらに来たようだ。
しかし、本当にペパロニは何をしていたんだ？　コンタクトなんて必要ないだろうに。……はっ、もしかして、ペパロニは本当にコンタクトを探していたのか。つまり、それは……
「ペパロニ、お前まさか……」
「ギクッ」
俺がそう言うとペパロニは明らかに動揺した様子を見せ、ものすごい量の汗をかき始めた。
ふっ、分かり易い奴だな。
「視力検査の時にコンタクトってこと申告せずにインチキしたな！」
「何!?　そうなのか！　ペパロニ、流石にそれは褒められたことじゃないぞ」
「え？　あ……ええ？」
俺の指摘によってチヨもペパロニが犯した罪を言及し始める。しかし、どうもペパロニの反応がおかしい。
彼女の表情は想定していた事態と全く違って拍子抜けしたような感じだ。もしかして、何か間違えたか？
「ドゥーチェ、ディレットーレ。ペパロニは私が落したコンタクトを探してくれていたんですよ」
「カルパッチョか」
そんな発言をしながらどこからか現れたのはこれまた可愛い後輩

の一人であるカルパッチョだ。
金髪ロングの髪が魅力的な少女である。彼女はアンツィオ高校では珍しく、おっとり穏やかな人物であり、暴走しがちなペパロニのブレーキ役だったりする。
そうそう、ディレットーレって言うのは俺のことだ。意味はイタリア語で部課長。僭越ながら戦車整備班のリーダーを任されている俺は戦車道チームの後輩達からそう呼ばれることも多い。
ディレットーレ、ディレットーレと呼びながら後輩達が寄って来てくれることはとてもうれしいものだ。チョがみんなに囲まれてドゥーチェ、ドゥーチェって呼ばれて楽しそうにしている気持ちがよくわかる。
「そうなのかペパロニ？」
「そ、そうなんッスよ！　カルパッチョがこの辺で落としたって言うから一緒に探してあげてたッス！」
「そうだったのか。すまなかったな、ペパロニ。お前がインチキしてるなんて疑っちまって」
「私も悪かったな」
「え、いえいえ！　全然気にしてないッスから」
俺とチョは無実のペパロニを疑ってしまっていたことを知って素直に頭を下げる。間違ったらすぐに謝るのは人として大事なことだ。
ペパロニは手を振って慌てたように気にしていないと言ってくれた。優しい後輩だ。
「コンタクトはさっき私が見つけました。手伝ってくれてありがとうございます、ペパロニ。そろそろ戻りましょうか。それでは、ドゥーチェ、ディレットーレ、これで失礼します」
「失礼します、姐さん、にーさん！」
「おう、また明日な」
「ちゃんと歯磨いてから寝ろよー」
ペパロニとカルパッチョの二人に対して俺は無難に、チョはなんだか母親みたいなことを言う。
それを聞き届けると、ペパロニとカルパッチョはどこかへ行ってし

まった。恐らく各々の家へ帰って行ったのだろう。はて、あいつ等は寮生だったかな、アパートを借りているんだったかな？　まあ、いいか。
「それにしても、カルパッチョってコンタクトだったんだな」
「私も初めて知ったぞ」
「まだまだみんなの知らないことはいっぱいあるんだな」
「そうだなー」
　俺とチヨは後輩の今まで知らなかった一面を知ることが出来て何となく嬉しい気持ちになり、一方でまだまだみんなのことで知らないことも多いのだと改めて思い知らされた。一緒にパスタを茹でた仲だというのに……。
「俺達も、ガレージに戻るか」
「うん」
　俺がそう言うと、チヨもそれに賛成のようで素直に頷いた。

　ペパロニ、カルパッチョ。
　ガレージへと歩みを進めながら俺は二人のことを考えている。
　あの二人は俺とチヨにとっても特に思い入れがある後輩だ。いや、別に後輩達に対して差をつけているわけではない！　今年入って来てくれた戦車道チームの三十九人、戦車整備班の八人の一年生達も皆俺達の可愛くて、愛おしくて仕方がない後輩だ。
　ただ、先輩が引退して俺とチヨだけになってしまった戦車道チームに新しく入って来てくれた二人は俺達にとって希望の光みたいに感じたのだ。
　そうやって考えて居ると、後輩たちが来てくれた時の事が自然と思い浮んで来た。

アンチョビピッツァ、誕生

俺とチヨがアンツィオ高校に入学してから早一年。一年間ずっと戦車道チームのために活動していれば、俺とチヨの仲が深くなるのも必然。ある時からか俺はチヨのことをチヨと呼ぶようになり、チヨは俺のことをコータローと呼ぶようになっていた。

一年生の三学期も大きな問題なく過ごすことができ、今は春休み。来週からは俺達も二年生だ。

「私達が戦車道チームの立て直しを始めてからもう一年……なのに……」

「ん？」

俺とチヨとでこれからのアンツィオ高校戦車道チームについての話し合いをしている所だ。会場は俺の家。チヨは学校の女子寮住まいのため、こういった集まりの時はいつも俺が借りているアパートでやることとなっていた。女子寮に男の俺が入ることは出来ないからな。

そんな話し合いが始まると、チヨは拳を強く握りしめ、ワナワナと震えながらそう呟いた。一息付いた所でチヨは一気に爆発する。

「なーんで履修者が私たち以外に増えないんだー!!」

「そりゃあ、決して強いとは言えない保有戦車、数少ない履修者、そして、大した実績も無い。わざわざ履修しようとは思わないよな」

俺がそう言うとチヨは「あぁ……うぅ……」と言いながらテーブルに突っ伏してしまう。

アンツィオ高校が保有する戦車はＣＶ３３やＣＶ３５のような豆戦車が半数を占め、まともに相手の戦車にダメージを与えることが出来る戦車はセモベンテが数両という有り様。Ｍ１３／４０中戦車も有るには有るのだが、過去の戦車道チームがパーツ取りに使ったようで、パーツを買い足さないと使うことは出来ない。

また、俺とチヨが入学した時には戦車道履修者は三年生が二人。二年生はなんと一人も居なかった。そして、三年生はとうとう卒業してしまい、現在の履修者は俺とチヨの二人だけになってしまった。チヨ

は二年生にして戦車道チームの隊長であるドゥーチェを襲名したことになる。
　もちろん去年俺達がただ手をこまねいていた訳ではない。ビラ配りや掲示板への広告掲示による宣伝、教師陣に頼んで戦車道履修を勧めてもらったりした。だが、残念ながら俺達の同級生で戦車道を履修してくれる人は居なかった。
「なんとしても今年の一年生に履修してもらわないと……」
「だがまあ、俺達も何もしてこなかった訳じゃないさ。最初の頃は慣れない高校生活に戸惑っていたのもあるけど、先輩達からアンツィオの戦車道を教えてもらったじゃないか。アンツィオの歴史や技を受け継ぐことも大事なことだろ」
「まあ……そうだけど……」
　アンツィオ高校の戦車道チームが得意とする、前進中のＣＶ３３が１８０度ターンして後ろの敵を攻撃できるようにするナポリターンなどの習得などが良い例だろう。
　それに、同級生たちは戦車道の履修こそしてくれなかったものの、彼らには色々な援助を約束してもらえた。金属加工部の友人からは彼らが作ったフライパンや鍋の提供を、農業科の友人からは新鮮な野菜のおすそ分けを、パスタ部の友人からは彼ら手製のオリジナルパスタの提供を、等々。
　これだけしてもらったら彼等に文句など言えるはずがない。
「今年こそ新入生大量ゲットだ！」
「そうだな。だが、去年と同じことをやってもまた同じ結果になるだけだ」
「うっ……」
　新入生にアピールするための戦車も、有名選手も、実績も無い。そうなると俺達に出来ることは……
「な、なんだ。そんなに私の顔を見つめて」
「チヨって可愛いよな」
「にゃっ!?　にゃにを言っているんだお前は！」
　彼女の良い所は長く付き合うことでその内面にあることが分かっ

た。そして、自然と彼女の力になってあげたくなるのだ。これは彼女の魅力だろう。
だが、全く面識のない相手を引きつけるには彼女の外面は……その……少々地味すぎる。いや、三つ編みメガネのチヨはとても魅力的であるのだが、アンチィオ高校に入学した子たちを引きつけるためには不向きだろう。
しかし、チヨは可愛い。女性の優れた容姿に関してあまり惹かれることが無い俺でも彼女の容姿は魅力的であることははっきりと分かる。彼女の優れた容姿は人の目を引くための大きな武器となる。人の目を引くというのは人集めの基本だ。
……ちょっと試してみるか。
「……おい、コータロー。せめて何か言ってくれよ」
「ふっ！」
チヨが何か言ったのと同時に俺は素早く手を動かしてチヨの三つ編みほどく。
これは師匠から教えてもらった技の一つ『髪崩し』。目にもとまらぬ速さで女性の結った髪の毛を解く技だ。師匠はこの技でかつて、奥さんのガチガチに固められた三つ編みを解いた後に「君はストレートが一番似合うよ」と言って口説いたらしい。ちなみに奥さんはそれ以来髪型はストレートにしているらしい。
だが、チヨの場合は髪を解いただけではまだ足りない。机に備え付けられた引き出しにリボンがあることを思い出した俺はそれを取り出し、それを使ってチヨの髪をくくってツインテールにする。
これまた素早く、かつ相手に悟らせないように作業を終わらせる。この技は師匠が寝ている奥さんに気付かれないように髪を弄って楽しむための技『髪作り』だ。
「どや？」
俺はそう言って手鏡をチヨに向けて今の自分の髪型を見せてあげる。
「ん？　って、なんじゃこりゃ!?　私の髪が！」
「アンチィオ高校戦車道チームには人を惹きつける魅力が足りない。

そこで、チヨには戦車道を履修する理由になってもらう事にした」
「はあ？　そんなこと出来る訳……」
「いや、出来る！　チヨはとても魅力的だから絶対に出来る！」
「え……そ、そうかな」
　チヨは照れくさそうに顔を逸らしながら俺が結ったツインテールを指で弄っている。
　ここが攻めどころだ！
「後メガネはコンタクトにして、ついでにツインテールはドリルにしちゃうか」
　若干趣味が入っていることは否定しない。
　それは置いておいて、この見た目だとＳっぽく見えるな。ああ、ちょうど良いものがある。
　俺は友人に貰ってからしまいっぱなしだったある物を押し入れから持ってくる。そして、それをチヨに渡す。
「後はこれを持つんだ」
「な、なんでこんなものが家に……　まさか、そういう趣味が！」
「か、勘違いするなよ！　これは友達が誕生日にネタでくれたアイテムだからな！　勘違いするなよ！」
　チヨに渡した物は鞭。形は馬を叩く時に使う鞭に似ているものであるが、これを渡してきた友人曰くジョークグッズらしい。
「そいつを構えてポーズをとれば印象に残るだろ」
「大丈夫かなぁ」
　チヨは鞭を両手で持ってぐにゃぐにゃと曲げながら懐疑的な表情をしている。
「大丈夫！　こうすることでチヨ自身がアンツィオ高校戦車道チームの象徴になるんだ」
　俺の尊敬するアニメの主人公も自身を象徴あるいは記号とすることで多くの人をまとめ上げていた。アニメの中の出来事とは言え、このことはあながち間違ったことではないと思う。そして、チヨにはそれが出来ると俺は思う。
「うーん、どうせなら象徴として分かり易い名前が欲しいよな……。

安斎……千代美……。あん……ちよ……。あ、よし！　チヨは今日からアンチョビだ！　戦車道の時はドゥーチェ・アンチョビって名乗るんだ！」
「えー！　なんだそれ。恥ずかしいぞ……。だ、だったらコータローもそんな感じの渾名？　を名乗れよ！」
どうやら自分だけ渾名で呼ばれるのは恥ずかしいらしい。とは言え、自分で自分の渾名を考えるというのは中々難しい。うーむ……。
「コータロー……工太郎……。いや、膝井……ひざ……そうだ！　だったらお前は今日からピッツァだ！」
「ああ、あのピザピザピザピザピザピザピザピザピザピザここは？　ヒザってやつか。なるほどな～」
「あの、そうネタを解説されると微妙に恥ずかしいんだが……」
そう言うとチヨは頬を赤く染めて恥ずかしそうに俯く。
ボソっと言ったダジャレを解説された感じだろうか。まあ、分かって言ったんですけどね。
「よし、それじゃあこれからチヨはアンチョビ、俺はピッツァだ！　俺達自身が戦車道チームの看板になって新入生をバンバン勧誘するぞ！」
「おー！」
それは新入生が入学してくるのを来週に控えたある日のこと。
アンツィオ高校の象徴アンチョビが生まれた日。
そして、主役のアンチョビを活かして、支える土台となるピッツァが生まれた日。

クゥ～
「あ、あはは……なんだかお腹が減って来ちゃったな。美味いパスタで何か作ってくれないか」
「はいはい」
チヨもすっかりアンツィオ高校での一年間でアンチィオの空気に染まってしまったな。
今日も話し合いというのはついでで家に夕飯食いに来たんじゃな

いのかと思ってしまう俺は悪くないはずだ。

瞬間、後輩、重ねて

「ムグムグ……ゴクリ。うまい！　それで結局の所は何をするんだ？」

チヨは俺が作ったナポリタン幸せそうな顔をしながら食べている。しっかりと噛んでから飲みこみ、話の続きをし始めた。

「とりあえずは宣伝だな。そこでドゥーチェ・アンチョビのお披露目だ」

「うう……恥ずかしいけど、仕方ないか……。それで、いつやるんだ？」

「そうだなぁ」

まず新入生が全員集まっている時がいいよな。

それでもって新入生だけでなく、在校生も居てくれたらノリと勢いでさらに盛り上げてくれるに違いない。

そして、戦車道にいち早く興味を持ってもらうために、新入生たちが戦車道以外の選択科目を履修するかを考え始める前に宣伝をする必要がある。

となると、良い機会があるな。

「良い事思いついたぞ。ふふ……ふふふ……」

「えぇ……あんまりいい予感はしないぞ」

そうと決まったら来週に向けて演説の内容を考えないといけないな。それと、学園長に許可を貰いに行く必要があるか。

俺は来週の計画を立てながらナポリタンを食べ、チヨはそんな俺を見て若干引きながらナポリタンを食べることに集中し始めた。

☆

すでに何回目かもわからないチヨとの話し合い兼夕食会から一週間。俺達がいる場所はアンツィオ高校の全校生徒を収容可能な講堂だ。

まさしく今この場所でアンツィオ高校の入学式が行われている

真っ最中である。そして、式典はまもなく終わろうとしている。
「これをもちまして第１３６回アンツィオ高校入学式を閉会いたします」
入学式の司会進行役を務める先生が入学式の閉会を宣言した。
先生の宣言は入学式が終わる宣言であると同時に俺達戦車道チームの宣伝が始まる宣言でもある。
俺とチヨは座っている在校生とは別の場所で待機しており、すぐに作戦を決行できるようにしている。
だが、チヨはさっきから緊張しっぱなしである。なんだ、そんなにドゥーチェフォルムで人の前に立つのが恥ずかしいのか？
「なあ……本当にやるのか？」
「ここまで来て何を今更。話は俺がするから、締めは任せたぜ」
「う、うむ」
緊張に堪りかねて小声で俺に話しかけてくるチヨ。こんなんじゃ先が思いやられるが、これでも彼女もアンツィオ高校の生徒だ。大勢の人の前に立ってしまえばテンションが上がってノリと勢いが出てくるだろう。
辛いのは始まる前だけだ。
「新入生が退場します。一組から……」
来た！
作戦スタート！
「ちょっと待ったー!!」
「「「「おー!!」」」」
先生の台詞を遮って俺が大声を上げて式を中断させ、チヨと一緒に待機場所から駆け出す。
俺達が式の途中で割り込むことは教師陣以外知らないはずなのだが、二年生と三年生はイレギュラーな事態にノリノリだ。
流石はアンツィオ生だ。期待通りである。
一方で新入生達は思いもよらぬ乱入者と、上級生達の謎の連帯感に戸惑っているようだ。
「よっと」

俺は叫びながらステージに駆け寄り、一息にステージの上に飛び乗る。
「コ、コータロー……私を上げてくれぇ」
が、チヨは意外と高さがあるステージを登ることが出来なかったらしい。無理せずに隣にある階段を使えば良いものを。
仕方がないから俺はチヨの手を掴んで思い切り引っ張り、ステージに上げてやる。
なんだか気が抜けてしまったが、気を取り直して俺は目的の戦車道の宣伝を開始することにする。
「我々は！　アンツィオ高校戦車道チームである！」
「「「「そうだ!!」」」」
俺が名乗りを上げると二、三年生たちが合いの手を入れてくる。練習もしていないのにこの連帯感は本当に流石と言わざるを得ない。
「今日は！　新入生諸君が我がアンツィオ高校にやって来た記念すべき日である！」
「「「「そうだ!!」」」」
「ところで！　我々、アンツィオ高校戦車道チームは履修者不足でたいへーん！　困っている！」
「「「「そうだ!!」」」」
「だが！　今年の我々はパスタに加えた隠しきれない隠し味のように、一味も二味も違う！」
「「「「そうだ!!」」」」
ここで一息置く。
演説で大切なのはメリハリだ。一番聞かせたいことを印象付けさせるのだ。
「まずはこの俺！　どんな戦車だって直して見せる！　俺の名前はピッツァだ！」
「「「「ピッツァ！　ピッツァ！　ピッツァ！　ピッツァ！」」」」
そして次が一番の盛り上げどころ。
「そしてそして！　このお方が我々、アンツィオ高校戦車道チームを率いるドゥーチェ・アンチョビだあああああああああ

あぁぁぁぁぁぁ!!」

「「「「おおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ!!!!」」」」

会場のボルテージはマックス!

ここでチヨによる締めで畳みかける!

俺はチヨの方へ手を向けて、聞いている生徒たちの注目を俺からチヨの方へと向けさせる。

「みんな私にちゅいて来ーい!!」

「「「「「「「ドゥーチェ!! ドゥーチェ!! ドゥーチェ!! ドゥーチェ!! ドゥーチェ!! ドゥーチェ!! ドゥーチェ!! ドゥーチェ!! ドゥーチェ!!」」」」」」」

どうやらチヨもステージに立って覚悟が決まったらしい。ちょっと台詞を噛みはしたが、俺がプレゼントした鞭をふるってカッコイイポーズをとっている。髪型をドリルツインテールにしてメガネを外したチヨは今までの物静かな雰囲気とは違い、キリッとして若干キツめの印象を人に与える。しかし、これくらいの方がアンツィオに入学した生徒に受けは良いだろう。そして、俺の見立て通りその見た目に鞭はピッタリの小道具だ。

とにかくチヨも無事に役割を果たしたみたいだし、これで終わりだな。

「以上! 戦車道チームでした! 解散!」

チヨがそう言うと、俺とチヨはステージから飛び降り、来た時と同じように駆け足で今度は講堂の出口へ向かって行った。

「えー……新入生が退場します。一組から順に退場してください」

進行役の先生が何事もなかったかのように遮られた言葉を言い直しているのが聞こえてきた。

☆

「コータロー、新入生は来てくれるかな?」

「書類を出しておいてやっぱ辞めますってことは無いだろ」

アンツィオ高校戦車道チームが作戦会議等で使う教室で俺とチヨ

は戦車道を履修してくれた新入生を待っている。机の上には二枚の書類があり、その紙には二名の一年生の名前と戦車道の欄に丸印が書かれている。
　しかし、チヨは新入生が本当に来てくれるかどうかが不安なのか、さっきからずっとそわそわしていて落ち着かない。
　入学式で行ったゲリラ宣伝に加えて通常の宣伝の結果、今年の戦車道履修者は二名ということになった。
　うーむ、やはり俺の演説スキルだと二人が限界だったか……。来年は全部チヨにやらせた方が良いかもしれない。
「本当に大丈夫かなぁ」
「大丈夫だって……たぶん」
　チヨがずっとこんな調子だから俺まで不安になって来たじゃないか。
「大丈夫かなぁ……大丈夫かなぁ……ん？」
「お？」
　チヨがそんな調子でいると俺とチヨが凝視していた教室のドアのノブが動いた！　このタイミングで顧問の先生とかだったらめっちゃ怒るぞ。
「失礼します！」
「すいませーん」
　知らない声！
　教師陣よりも若い声！
　それも二人！
　これは来た！
　ドアが開いた瞬間に俺とチヨは立ちあがり、後輩たちが教室に入って来た瞬間に俺とチヨとで二人の後輩を挟み込む。その行動は待ちに待った新入生の二人を絶対に逃がさないと言う思いによるものであるのは仕方がない。
　一人は黒髪ショートヘアーの女の子。もう一人は金髪ロングの女の子のようだ。
「戦車道へようこそ！」

「俺達は二人を歓迎する！　これからよろしく！」
「よ、よろしくお願いします」
「お願いします……」
「さあさあ！　歓迎の宴会だ！」
「ピザだ！　パスタだ！　カプレーゼだ！」
「え？　え？　え？」
「えーっと……」
俺とチヨによる怒涛の畳みかけに二人の後輩はたじたじだ。しかし、一年間待ち望んだ俺達以外の戦車道履修者。二人は俺達にとってかけがえのない後輩なのだ。我慢など出来ようはずがない。
俺達は二人を歓迎すべく準備していた料理をテーブルに並べ始めた。

「おー！　すごいッス！　料理がこんなに沢山」
「どれも美味しそうですね～」
「どんどん食べてくれ！　これは二人のための宴会で、料理だからな」
「この料理は全部先輩達が作ったんですか？」
「おう、俺とドゥーチェの手作りだぞ」
金髪の後輩がそんなことを聞いてきた。
アンツィオ高校は貧乏高校。そのため部活動等に支給される予算は少ない。その少ない予算を補うために学生たちは学校の敷地内で屋台を営むことが多いのだ。その例に漏れず、俺達戦車道チームもナポリタンの屋台を出して予算を確保している。そのため、俺とチヨは料理に関して結構な自信を持っていたりする。
「はえ～流石ッス。こんなおいしい料理を食べたらみんな戦車道を履修するんじゃないッスかね？」
「え？」
黒髪の後輩がぽろっとそんなことを言う。
料理を使って勧誘……。
その発想は無かった。いや、でも、いくらアンツィオの学生とは言え、まだアンツィオの空気に染まり切っていない一年生が料理に釣ら

れて戦車道を履修してくれるなんてことは……

……

来年は屋台で「私たちは戦車道チームです」ってことを新入生にアピールしてみるか。

次の年、戦車道履修者に戦車道チーム三十九人、戦車整備班に八人の新入生が加わった。

チハたんごころを、君に

夜の散歩を終えて、俺とチヨは戦車が仕舞われているガレージに戻って来た。
「いい気分転換になったぜ。サンキューな」
「なに、気にすることは無いさ。こっちこそ、飲み物ありがとう」
「気にするな。いや、ちょっとは気にしろ」
「むっ、それは私の真似のつもりか？」
チヨがよくやる言い回しの真似で返事をしてやる。そんな俺に対してチヨは口をとがらせながら弱く睨んでくるが、全然怖くない。
戦車の修理に身が入らなくなって来ていた頃にチヨが提案した息抜きは、思っていた以上に効果があったみたいだ。さっきまで頭の中で繰り返し鳴り響いていたアンツィオ敗北を知らせる放送は今ではすっかり鳴りを潜めてしまった。
「さーてと、気分も良くなったし、戦車の修理を再開するか。まずはＰ４０（大物）からかな」
傍に置いてある基本的な工具を入れたポーチを手に取り、腰に巻き付ける。これで戦車整備の準備は完了だ。
俺はＰ４０を見上げる。
Ｐ４０はイタリア製の重戦車。これまで豆戦車と少数の自走砲しか保有していなかったアンツィオ高校戦車道チームの秘密兵器だ。ああ、もう公開されてるから秘密じゃない兵器か。
何にしてもＰ４０はアンツィオ高校において、一番強力な戦車と言うことが出来る。もちろん、時と場合と条件次第で話は変わって来るだろうが。
「こいつを手に入れるのにも苦労したよな」
「ああ……そうだな」
Ｐ４０は歴代の戦車道履修者が少しずつお金を溜め、俺達の代でとうとう目標金額に達したために購入することが出来たのだ。
実はＰ４０のお金をこれまでと同じペースで溜めていたら今年の戦車道大会までに間に合わないことが判明した。そこで、今年戦車道

を履修してくれた沢山の一年生達には一日三回のおやつを一回減らしてもらい、その分のお金をＰ４０購入に充てて協力してもらったのだ。
「後輩達には感謝だな」
「ああ、私もおやつを一日一回にした甲斐があったってものだ」
後輩に協力を申し出た時、チヨはみんなの前で「もちろん、お前たちばかりに苦労は掛けない。私は……私は！　一日のおやつを三回から一回にするぞおおおおおおおおおぉぉぉぉぉ!!」と、苦渋の決断を下したような表情でそう言った事は記憶に新しい。
ちなみに、俺はもともと学校でおやつの時間は設けていなかったので、彼女たちのおやつ三回分のお金をチームに寄付することにした。そうしたら後輩達から尊敬のまなざしで見つめられた。
何はともあれ、その成果もあり、今年の大会の一回戦には残念ながら間に合わなかったものの、二回戦の対大洗女子学園戦で投入することが出来た。
Ｐ４０をフラッグ車とし、その車長はチヨ。チヨは後輩達を率いて戦い、そして敗れた。行動不能を示す白旗がその事実をまじまじと俺に訴えているようだ。だが、そのことで俺の心が乱されることはもうない。なんて言ったって、試合で負けた本人たちが気にしていないのだ。チヨと散歩をしているうちに気が付いた。それなのに裏方の俺が気にしたところで仕方のない事だ。
「さて、俺は徹夜の覚悟だけど、チヨはもう帰った方がいいんじゃないのか？」
まだ深夜と言う訳ではないが、日はとっくに暮れて外は真っ暗だ。学生はもう家に帰るべき時間だろう。
「……私も残らせてくれないか。そんな気分なんだ」
「……そうか」
今日の敗戦を気にしてはいないとはいえ、今日という日が俺達にとって大きな意味を持つ日であることには変わりはない。これまで一緒に戦ってきた戦車達と今日という日を少しでも長く過ごしたいと思うのは自然である。

「コータロー！」
「ん？」
俺がＰ４０の修理に取り掛かろうとした時、チヨは俺を呼び止め、こんなことを聞いて来た。
「お前……は……す、好きな子は……いるか……？」
好きな子？　何で今更そんなことを？
「そりゃあ……」
チヨの質問に答えようとした時、俺は気が付いた。
チヨの真剣な表情に。そして、真剣な表情と共に不安げな様子が見て取れる。
今日は珍しい日だ。チヨが不安げな表情をするなんて。
一昨年までは、困った時や心配事がある時はしょっちゅう不安げな表情を見せていたチヨだったが、今年に入ってからその表情をすることはめっきり少なくなっていた。例えそれが俺とチヨしかいない時であってもだ。
アンツィオ高校の空気に更に馴染んだということもあるだろう。だが、後輩たちがやって来て、強いドゥーチェであろうとして気を付けていたというのが大きいと俺は思っている。
そんなチヨが今日は二度も不安げな表情を見せたのだ。
「冗談じゃ……なさそうだな」
「ああ、本気だ」
チヨの気持ちは確からしい。
チヨは……どうやら俺の気持ちに感づいているようだ。
ふぅ……答えるしかなさそうだな。
「そうだな。俺が……俺が好きな子は……」
これを答えたらチヨに幻滅されるかもしれない。
これを答えたらチヨに嫌われるかもしれない。
これを答えたらチヨが離れてしまうかもしれない。
だけど、チヨがここまで真剣に聞いて来ているのだ。だったら、俺もそれに答えなければならないだろう。
俺は再び口を開いた。

チヨの質問に答えるために。
「九七式中戦車（チハたん）」
「は？」
それはもう語尾にハートマークが付くくらいの勢いでそう答えた。
チハたんは第二次世界大戦当時に日本陸軍が使用した中戦車である。
装甲貫通力の低さや装甲の脆さ等の問題を持ち、同時期の他国中戦車と比較するとその容姿は明らかに小さい戦車である。
そして何より……
そんなこの子が一番かわいいと思います！
チハたんを主力として戦車道を行う高校で知波単学園という学校がある。この学校では『突撃して潔く散る』事を美徳としており、彼女たちの試合にもよく現れている。
この考え方は『知波単魂』と呼ばれている。
では、この溢れ出るチハたんへの愛は、思いは、恋慕はなんと表せば言い換え良いのか？
俺は『チハたんごころ』を提唱する！
「「「「「「えー!?!?」」」」」」
「にーさん！　そりゃないッスよ！」
「ディレットーレェー……」
「（その答えは）ないです」
「うおっ、お前たちみんな集まってどうした？　ていうか、ペパロニとカルパッチョは帰ったんじゃなかったのかよ」
ガレージには俺とチヨの二人しかいないと思っていたのだが、どうやらそういうわけでは無かったらしい。突然声を上げたのは戦車道を履修している一年生、二年生だ。どうやら全員いるらしい。
ある者はＣＶ３３の車内から、それ以外はＣＶ３３の後ろから顔を出している。
「にーさん！　一番好きな戦車（子）はＣＶ３３って言ってたじゃないッスか！」
「あれ？　そこに突っ込むんですか？」

後輩たちを代表してか、ＣＶ３３の陰に隠れていたペパロニとカルパッチョが俺とチヨが居る方へ向かって来た。
確かに、ペパロニが言っているようにＣＶ３３は俺の好きな戦車であることに間違いはない。しかしそれは……
「イタリア戦車の中では……な」
「なっ！」
そう、俺がみんなの前でＣＶ３３を好きな戦車と言ったときの会話の流れは『イタリア戦車の中で』と言うものだった。
どうやらペパロニもその事を思い出したらしい。
「騙すつもりは無かったんだ。ただ、言うタイミングを見失ってしまってな」
「うう……そりゃないッスよ……」
すまないな、ペパロニ。
今でこそ俺はアンツィオ高校に居るが、本当は別の学校へ入学する事を考えていた。
一つは俺の友人二人がかねてより目指すと言っていた黒森峰学園。その友人とは師匠の娘のことであり、師匠の家に入り浸っていた俺が彼女達と戦車と言う共通の話題を通して仲良くなるのに時間はそう掛からなかった。引っ越してから会う機会は格段に減ったとは言え、二人との交流は今でも続いている。友人と同じ学校に通いたいという思いが俺には有った。
しかし、それと同等の思いも俺は持っていた。それはチハたんへの愛、チハたんごころ。
そのため、戦車道チームがチハたんを主力として使っている知波単学園に行くことも考えた。
その二校で進学先の候補として絞り込んでいた頃、アンツィオ高校の学園長から声が掛かったのだ。
学費免除は偉大だとだけ言わせてもらおう。
「はっ」
さっきまで呆けていたチヨが復活したようだ。俺が一番好きな戦車がイタリア戦車でなかったことがそんなにショックだったのだろ

うか？
「はは……まあ、お前がそういう奴だってことは私が一番知ってたさ……」
「ドゥーチェ……」
落ち込んだ様子のチヨにカルパッチョが声をかけている。え……そんなにショックなの？
すると、さっきまで四つん這いになりうちひしがれていたペパロニが復活した。
「アンチョビ姐さんはですね、今年の大会が終わったらにーさんに告白す……」
「わ゛ー！　わ゛ー！　わ゛ー！　何でその事を知ってるんだ!?」
ペパロニが何かを言おうとした所にチヨが割り込んで声を掻き消してしまう。チヨのせいでペパロニが何を言いたかったのかさっぱり解らなかった。
「ごほん！　ところで、コータローは大学ではどうするつもりなんだ？」
おや？　チヨが後輩たちの前で俺の事を名前で呼ぶなんて。一体どういった心境の変化が有ったのだろうか。
それより、大学のことだったな。
「特に行く学校は決めてないけど、取り合えず戦車道の大学選抜チームに土下座でも何でもして戦車の整備をさせてもらえるように頼むとするかな」
「ふふ……コータローらしいな」
チヨは少しだけ笑みを浮かべる。
「なら、私も大学選抜に選ばれるように頑張るとするか」
「おお！　それはいい。また一緒に戦車道が出来るな。ドゥーチェ・アンチョビなら余裕で選ばれるさ」
俺が土台でチヨがメインで。
そんな感じでやっていくのが俺は好きだ。それはこの三年間がどうしようもなく楽しかったことが証明している。
「ああ、その前に言うことがあった。コータロー」

「ん？　なんだ？」
　今から楽しみになった大学生活に思いを馳せていた俺は、チヨの呼び掛けにより現実に引き戻される。
　俺が見たチヨは俺の瞳をじっと見つめていた。
「私は、コータローのことが好きだ」
「え……」
「「「「おおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」」」」
　好き？
　誰が？
　チヨが。
　誰を？
　俺を。
　そうだったのか。チヨは俺の事を好いてくれていたんだ。
　じゃあ、俺は彼女の事をどう思っている？
　当然、嫌いな訳がない。
　彼女と過ごした三年間はとても楽しいものだった。
　喜ばしい時に一緒に居れば、その喜びはより大きくなった。
　悲しい時に一緒に居れば、悲しみは少なくなった。
　もちろん喧嘩する時だってあった。それでも、いつの間にかお互いが謝って今ではいい思い出だ。
　ああ。
　なんだ。答えはずっと前から決まっているじゃないか。
　俺は……
「俺は……」
　ここから先の台詞は後輩たちのドゥーチェコールに掻き消されてしまった。

おまけ
まほ、来校（前編）

戦車道大会は大洗女子学園が黒森峰学園を見事破って優勝を勝ち取った……らしい。らしい、と言うのはこの結果は人づてに聞いた事だからである。

本当なら俺達も大洗の応援に行ってその勇姿を直接この目で見るはずだったんだが……その、色々ごたごたしてしまって見ることが出来なかった。うん、本当に色々あったんだ……。

何はともあれ、優勝は俺達に勝った大洗の子たちなのだ。それはとても喜ばしいことじゃないか。うんうん。

大会も、その後の戦車の修理も終わらせた俺達はちょっとした非日常の日々から学生としての日常に戻っていった。

大会直前の緊張感から解放されたみんなも思い思いに勉強、遊び、趣味などの日常の日々を過ごしている。いや、あいつらは大会直前だろうがなんだろうがいつも通りノリと勢いで生きているから、緊張なんてしていなかったか。

ところで、学生としての本分は勉強な訳で、戦車道の練習に集中していたために勉強を疎かにしていた人達はテスト直前になってヒイヒイ言いながら期末テストを乗り越えていた。その中に我らがドゥーチェも含まれていたのは後輩の皆には内緒だ。

チヨは戦車道において素晴らしい作戦を考える優れた戦術家ではあるのだが、それと学校の勉強とでは必要な能力が違うのであろう。

チヨはアホの子とは言わないが、あまり勉強が出来る方ではないのである。

俺？　俺は普段からコツコツ勉強するタイプだから、学年上位を狙うならともかく、定期テストの追試に引っ掛からないようにする程度余裕のよっちゃんだ。テスト前にヒイヒイ言ってたドゥーチェはワシが育てたと言っても過言ではないじゃろう。

それがついこの間までのお話。

長く辛いテストが終わると、やって来るのは学生達の癒しとも言える時間、夏休みだ。
三年生で大学受験を控えている俺達は夏休みを遊び倒すという訳にはいかないが、少し位の息抜きは出来る。
長期休暇の間、学園艦は母校である清水港に帰港している。そのため、多くの学生たちは陸にある各々の実家へ帰省している。その例に漏れずに俺達戦車道チームも帰省しているのかというと……
「はい！　鉄板ナポリタンお待ち！」
「わー！　とっても、美味しそう！」
鉄板ナポリタンを売っていた。
「いやー、やっぱ夏休みは沢山売れるッスね！」
「ああ。稼げる時に稼いでおかないとな」
アンツィオ高校の学園艦施設にはスペイン階段風階段、三神変形合体教会、トレヴィーノの泉などイタリアにあるそれっぽい建造物が揃い、テーマパークみたいになっている。
他にも日伊友好の記念として贈られたポンペイの巨大宮殿の石柱（本物）、イライラした時に思いっきり叫んだり、オペラ上演もやるパンテオンや戦車道訓練場兼運動場兼舞台兼お祭り広場であるコロッセオもあり、街並みもローマのそれなため、イタリア気分を味わいたい多くの観光客が訪れるのだ。
しかも、今は夏休み。普通の観光客が多いのは当然として、来年アンツィオ高校に入学を考え、見学に来た中学生とその親も普段より多く来校する。
さらに、夏休みということでアンツィオ生の多くは帰省している。そうすると、いつもなら多くの露店が並ぶ屋台街も、その数は普段よりずっと少ない。
この二つの条件によって、客の入りがいつもより多くなるのだ。
他の部活動等とは違い、戦車道はその性質上とてつもない額のお金が必要となる。
パーツを買い換えるにしても、燃料弾薬を補給するにしても、そして、新しい戦車を買うにしても。

政府から多少の補助金は出ているが、それでも多くのお金が必要である事実は変わらない。
そのため、俺達戦車道チームは夏休み返上でお金稼ぎである。
「この調子だと夏休みの間の稼ぎだけでタンケッテが買えるッスね！」
「これ以上豆戦車（タンケッテ）増やしても仕方ないだろ……個人的にはアリだけどな」
せめて、自走砲（セモベンテ）を何台か買うことが出来ればなぁ……なんて考えながら、俺は鉄板ナポリタンに載せる卵焼きを焼き、完成した鉄板ナポリタンを客に渡す作業を続けていた。
ちなみに、ペパロニはナポリタン作りの担当だ。彼女が作るナポリタンが一番美味いというのは戦車道履修者で知らない者は居ない。
「私にも一つ頼む」
「はいよ！」
と、また一人客が来たようだ。ペパロニが対応している。
ペパロニがアンツィオ特製ナポリタンの簡単な作り方を客に話しながら手際よく作っていく。
俺の仕事は彼女のナポリタンが完成するのと同時に仕上げの卵焼きを完成させ、ナポリタンの上に載せること。タイミングが命。
……オリーブ油はケチケチしなーい
……ひき肉はたっぷりと
……アンツィオ特製トマトソース合わせたら
今です！
ペパロニが鉄板の上にナポリタンを盛り付けると同時に、俺は良い具合に火が通った卵焼きをナポリタンの上に被せるように載せる。
完成した鉄板ナポリタンをお客さんに手渡しておしまいだ。
「はい！　鉄板ナポリタンお待ち！　って、ん!?」
「ありがとう」
いつもと同じように鉄板ナポリタンを手渡して、その時に初めて客の顔を見る。すると、その客は俺のよく知る人物だということに気がついた。

「まほちゃんじゃん」
「今気が付いたのか。久しぶりだな、コウ」
彼女は西住まほ。
戦車道の強豪校、黒森峰学園戦車道チームの隊長を務める女性であり、日本で最も有名な戦車道家元の一つ、西住流を受け継ぐ西住家の娘なのだ。
だが、俺にとって彼女はそれだけの人物ではない。彼女は俺が尊敬して止まない師匠の二人の娘の内の姉の方である。
西住姉妹が行くから俺も黒森峰を目指そうと思うくらいには彼女達との付き合いは長く深い。
「それで、今日は観光か？　まさか、アンツィオ高校に黒森峰の隊長直々に偵察ってことは無いだろうしな！」
俺は「あっはっはー」と笑いながらまほにアンツィオ来校の理由を聞いてみた。
「アンツィオには一度来てみたかったんだ。ついでにコウの様子も見てやろうと思ってな」
「そいつは光栄だね」
まほちゃんは俺のかーちゃんか何かか？　なんて思わないでもないが、別嬪さんに気にかけてもらうというのは悪い気はしないね。
「当然だ。コウは私の（専属整備士）だからな」
「まだそう言ってくれるのか。うれしいねぇ……」
俺が小さいときから戦車の整備の仕方を学んでいたと言うのなら、まほちゃんは戦車道家元の娘として戦車道を小さい頃から修めていた。
そんなまほちゃんはかつて、整備の勉強をしていた俺に「コウは私とみほの専属整備士にするぞ」と、言ってくれたのだ。
整備士にとって専属になるというのはとても名誉なことなのだ。それも優秀な戦車乗りともなれば尚のこと。
その技術を認めて、自分の戦車だけを見て欲しいと言うことなのだから、それは一種のプロポーズと言っても良いだろう。
当時の俺はまほちゃんの申し出にたいそう喜んだものだ。

懐かしいな……小学三年生位のことだったか。
だが、結局俺はアンツィオ高校に入学することになり、彼女との約束を果たすことはまだ出来ていない。
小さい頃の口約束とは言え、結果的にだが彼女との約束を果たす絶好の機会をふいにしてしまったのも事実。
そんな俺をまだ専属整備士と言ってくれるまほちゃんに対し、ありがたいと思いつつも申し訳なく思ってしまう。
「まさしくこれが、（整備士）冥利に尽きるってやつだな」
「そうか」
そんな風にまほちゃんと話していると、客の流れが途絶えていることに気が付いた。昼時も過ぎて食べ物を求める人が減ったのだろう。
ちょうど良いのでまほちゃんにアンツィオ高校の案内でもしてあげよう。
「ペパロニ、俺はちょっとこの人を案内するからしばらく店頼むわ。代わりにそこら辺にいる後輩捕まえて応援にやるからさ」
「……あ、はい！　い、いってらっしゃいッス」
ペパロニは何を焦っているんだと少し疑問に思ったが、深く考えることはなく、「頼んだぞ」と彼女に伝えて俺はまほちゃんを連れて歩き始めた。

「た、大変ッス……姐さんに伝えないと！」
工太郎の姿が見えなくなってから、そう呟いたペパロニ。
料理人の証である白い帽子を頭から外し、彼女が姐さんと呼んで慕う少女のもとへと駆け出した。
工太郎に応援として召集された後輩の少女は本来居るはずのペパロニが居らず、一人で店を切り盛りするはめになったのは余談である。

まほ、来校（後編）

「姐さん！　大変ッス！　姐さん！　アンチョビ姐さーん！　大変ッスよ！」
「どうしたんだペパロニ。そんなに慌てて」
　ペパロニは別の場所で露店を開いていたアンチョビの元へと慌てた様子でやって来た。
「アンチョビ姐さんが大変ッス!!」
「はあ？　別に私は大変じゃないぞ」
　要領を得ないペパロニの言葉にアンチョビは首を捻るばかりだ。
「ペパロニ、落ち着いて。状況を詳しく説明して」
　アンチョビとペアを組んで露店をやっていたカルパッチョがペパロニに冷静に説明するように促す。
「えっと……さっきにーさんの知り合いの女の人がお客さんとして来たッス」
「ふむふむ」
　相槌を打って続きを話すように促すアンチョビ。
「そうしたら、女の人がピッツァにーさんに向かって「お前は私のだ」って、言ったッス！　それに対してにーさんが「男冥利に尽きる」って返してたんッスよ！」
「ディレットーレが？」
　ペパロニはさっき目にした情景を思い出しながら、まほと工太郎の会話を二人になりきって再現する。少々演技がわざとらしいのはご愛敬。
　ペパロニの話を聞いたカルパッチョはその事を信じられず、怪訝な様子で疑問を程す。
「どうも二人の会話から察するに、二人は昔馴染みっぽいッス。そのすぐ後に二人でどっか行っちゃったんで、急いで姐さんに知らせに来たッス」
「それ本当？」
「不倫ッス！　絶対不倫ッス！　いや、二股ッスかね？」と騒ぐペパロ

ニ。
「うーん、ディレットーレがそんな不誠実なことをするとは思えないんだけど……ドゥーチェはどう思いますか？」
やはり腑に落ちない様子のカルパッチョは工太郎をよく知るアンチョビに意見を求めてみるが……
「？　ドゥーチェ？　あっ」
カルパッチョがさっきから反応が無いアンチョビに目を向けてみると、そこには表情をピクリとも動かさず外からの呼び掛けに全く反応を返さないアンチョビが立っていた。
「フリーズしてる……」
アンチョビはペパロニがした話の余りの衝撃に固まってしまっていた。
「ドゥーチェが大変っていうのもあながち間違いじゃなかったのね」
しみじみとそう呟くカルパッチョ。
未だ固まったままのアンチョビ。
「うーん、あの人どこかで見たような気がするんだよなぁ」と首を捻って考えるペパロニ。
そんなカオスな光景がしばらく繰り広げられていた。

☆

「それにしても、直接会うのは本当に久しぶりだな」
「最後に会ったのは……高校に入学する直前の春休みか」
そんな感じに話しながら、俺はアンツィオ高校にある名所を案内していった。
まほちゃんは一年の頃から手腕を買われて次代の隊長候補として練習に明け暮れていたし、俺は俺でアンツィオ高校戦車道チームの再興に走り回っていた。
こんな二人であるため中々日程が合わず、こうして直接顔を合わせるのは二年半ぶり位になっていた。

「最近はもう忙しくないのか？」
「我々三年生にとってはこの間の大会が最後だからな。名目上隊長はまだ私のままだが、既に隊長としての仕事の引き継ぎを始めている」
「なるほど。だったら気楽なもんだな。次の隊長は今年の副隊長か？
確か逸見エリカさんだったかな」
「ああ。エリカなら来年の戦車道チームを良い方向へ導いてくれるはずだ」
逸見エリカ。
俺が彼女の名前を知ったのは彼女が黒森峰学園に入学してからだ。
高校で活躍する選手の多くは中学生の頃から優秀な成績を残している場合が多いため、今活躍している有名選手は中学生の頃から把握していた。
そんな中、逸見さんは中学で目立った成績は残していなかったにも関わらず、強豪黒森峰学園戦車道チームの副隊長にまで上り詰めている。
きっと、高校に入ってから文字通り血の滲むような努力を行ったに違いない。
俺が見た彼女が指揮する車両は、一見ひねくれている様で、実際は純粋で真っ直ぐな心意気を感じるようだった。
そして、そこから滲み出る執念にも似た何か。強い想いを抱く者だけが纏う雰囲気を持っていた。
まほちゃんの言う通り、彼女なら黒森峰を率いて行くことが出来るだろう。
「コウはどうなんだ？」
「アンツィオは人手不足だからな。三年は俺とドゥーチェの二人だけとは言え、俺達二人が引退してしまうと色々大変なんだ。それと……なんとも不安でな。取り合えずやれるだけやってから引退するつもりなんだ」
アンツィオ高校戦車道チームの次期ドゥーチェはペパロニということで俺とチョの間で決定している。
普通の戦車道チームを率いる隊長とするならカルパッチョの方が

良いのかもしれないが、アンツィオ高校戦車道チームの、ドゥーチェとするならその性質上ペパロニが最適なのだ。
それに、カルパッチョ本人も自身が先頭に立って人を率いるより、隊長を支える方が性に合っていると自覚していることも要因の一つだ。
それは良い。良いんだが……。
あの後輩たちだけでこれからアンツィオは大丈夫なんだろうかと心配になってしまうのだ。
俺もチヨも後輩たちを信用していない訳ではない。しかし、これからのアンツィオ高校はあの子達だけでやっていけるのかと想像すると……どうしても不安になる。
これが親が子供を心配する感覚なのだろうか？　たぶんそうだと思う。
「過保護すぎではないか？」
「仰る通りだと思います……」
俺とチヨは引退の時期が近づくにつれてその事が頭をちらつき始め、最近は二人で頭を抱えて悩んでいる。
もういっそのこと卒業するまで世話焼いてやろうか。後輩たちのためにはならないかもしれないが、そっちの方が俺の精神衛生上良さそうだ。
「何はともあれ、この三年間は悪くない時間だったよ」
「そうか」
出した結論は先伸ばし。
話をそらして無理矢理今の話題に結論付ける俺。
まほちゃんもそれ以上は突っ込んでこない。まあ、彼女には関係の無い話だしな。
その後も俺達は互いの近況等を話しながらアンツィオ高校を歩き回った。
観光名所を全部回った頃には日は傾き始めていた。
「今日はありがとう。アンツィオも良い学校だな」
「どういたしまして。そう言ってもらえると一生徒として嬉しいぜ」

イタリアの名物も買うことが出来る購買でお土産を買ったまほちゃん。その左手にはお土産を入れた紙袋が提げられている。
まほちゃんはこの後飛行機で熊本の実家に帰るそうだ。
学園艦の乗降口で俺達は別れの挨拶を交わす。
だが、彼女には直接言っておかないといけないことがあるんだ。
「まほちゃん、約束、守れなくてごめん」
「何、気にすることはないさ」
それは俺が西住姉妹の専属整備士に成るという約束だ。
少し前の俺なら、喜んで彼女達の専属整備士に成っていただろう。だけど、俺にはもう一人、その人のために戦車を整備したいと思える人が出来てしまった。
……なんだか、不倫の言い訳をしているみたいだ。あなたの他に好きな人が出来たの、ってか。
「専属には成れないけど、まほちゃんが俺に言ってくれればいつでも戦車の整備をしに行くからな。それに、まほちゃんが大学選抜に選ばれたら君の戦車は俺がしっかりと整備させてもらうよ」
「ああ、それは心強い。コウが整備してくれた戦車は調子が良いんだ」
相変わらずまほちゃんは整備士にとって嬉しいことをいつも言ってくれる。
そう言われたら期待に応えないといけないな。
「私はそろそろ行くよ」
「おう、また今度な」
そう言ってまほちゃんは学園艦のタラップを降りようとした時だった。
「そこの二人ちょっと待った！」
聞こえてきたのはこの三年間で親の声より聞いた声。
振り返って姿を確認するまでもなく、声の主が誰か何てことはすぐわかる。
「アンチョビか」
ドゥーチェ・アンチョビ。
うん、思った通りだった。

チヨの両隣にペパロニとカルパッチョが居ることが確認できたため、チヨのことをアンチョビと呼ぶ。
おそらく、ペパロニがチヨに黒森峰の隊長がアンツィオ高校に訪れたことを知らせたのだろう。今日は私用で訪問したとは言え、同じ戦車道チームの隊長として挨拶をしておこうとでも思ったのだろう。
「コータロー!!」
え？　俺？　何で？
「私との……私との関係は遊びだったのか！」
……はい？
「コータローは幼馴染みの女の子との関係が今日までずっと続いていたんだろう！　そして、今日、迎えに来たその子と一緒にアンツィオ高校を去っちゃうんだろう……」
チヨは目に涙を溜めてそう言った。最初の勢いはだんだんと無くなり、最後の方は声がかすれてほとんど聞こえなかった。
うん、何だかとんでもない勘違いを受けている気がする。
まあ、なんだ……。
チヨは恋愛小説の読みすぎだな。
一体どこからそんな話が出てきたんだか。
しかし、参ったな。
俺の経験（ギャルゲー（全年齢対象版））上、こういった状況では男の側がなんと言おうと混乱した女性は聞き入れてくれない可能性がある。
どうやって誤解を解こうか悩んでいると、まほちゃんがチヨの前に歩み出た。
「貴女が安斎千代美だな。こうして直接話すのは初めてだな。初めまして、西住まほだ」
「ぐすっ……そう言えば、アンタ黒森峰の……」
チヨは涙ぐんでしまい、最後まで言葉が紡げていない。
どうやらチヨは今までまほちゃんがあの西住まほだということに気が付いていなかったらしい。
「まず言わせてもらうが、君は大きな勘違いをしている」

「……」
チヨは何も言わない。
話を聞くつもりがあるのか、はたまた声を出せないのか。
「君がコウと恋仲であるということはコウから聞いている」
「え？」
「おそらく君が告白した次の日だろう。「彼女が出来たー！」と、コウは嬉しそうに電話で報告してくれたよ」
にょわあああああああ!?
まほちゃん！　それは秘密だってば！
「私は人の彼氏を盗ろうなどと、そんな無粋な人間ではない」
「え……でも……「コウは私のものだ」って、言ってたと……」
「正しくは『コウは私の専属整備士だ』だな。最も、コウは君の戦車も整備したい様だから、私の専属に成るという話は断られてしまったよ。それと、私の言葉足らずで誤解を与えてしまったようだ。すまない」
そう言ってまほちゃんはチヨに軽く頭を下げる。
「で、でも……コータローが「男冥利に尽きる」って……」
「『男』なんて言ってないぞ。言葉にはしなかったが、俺は『整備士冥利に尽きる』と、言ったつもりなんだ」
「え……」
俺はチヨの第二の勘違いをすぐさま修正する。
しかし、俺が言っていない単語が加えられていたのは何でだ？
俺とまほちゃんの話を聞いて、その内容をチヨに伝えた人物と言えば……
ペパロニがあからさまに視線をそらす。
あいつか……。
はあ……全く……仕方がないやつだ。
俺は思わず手で頭を押さえてしまう。
「君とコウの関係を、私は祝福しよう。コウは一見しっかりしているようで意外と抜けたところがある男だ。これからコウを宜しく頼む」
「え……あぅ……は、い？」

だから、まほちゃんは俺のかーちゃんか！
まほちゃんは再びチヨに頭を下げる。
かーちゃんでもそこまでしないぞ。
俺まで恥ずかしいんだが。
「えっと……全部……私の勘違い？」
「ああ」
チヨは一つ一つ確認するようにまほちゃんに聞く。
「まほは……コータローの彼女じゃ無い？」
「そうだな」
さっきまで蒼白かったチヨの顔色が赤みがかってきた。
「コータローは……私の……か、かか、彼氏？」
「少なくとも、コウは君が彼女であることをとても喜んでいたよ」
チヨは顔を俯かせてしまうが、耳の先まで真っ赤になっており、プルプルと僅かに震えている。
誤解を完全に解くのは……ここしかない！
「チヨ！　昔も今もこれからも！　俺のパートナーはチヨだけだぞおおおおおおおおおおおおお!!!!」
叫んだ。
それはもう腹の底から声を出して本気で叫んだ。
回りに居た人達も「なんだなんだ」と、こちらに目を向けてくる。
「……ぅ」
「う？」
俺の叫びを聞いたチヨは一瞬震えを止めて、謎の『う』を発する。
「う゛う゛う゛わ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛!!!!
はーずーがーじい゛い゛い゛い゛い゛い゛い゛ぃぃぃぃ!!!!」
『う』を発したと思ったら、言葉のほとんどに濁点を付けながら何処かに走り去って行ってしまった。
「あ！　ドゥーチェ、待って下さいッス！」
さっきまで気まずそうにしていたペパロニは突然走り出したチヨを追いかけていく。
「はぁ……こんなことだろうと思っていました。ディレットーレ、私

もこれで失礼しますね。後でドゥーチェとゆっくりお話してあげてください」
カルパッチョは俺とまほちゃんに一礼してからチヨとペパロニを追いかけていく。
「さて、私ももう帰らなければ。それでは、また次の機会に会おう」
「お、おう。また今度」
まほちゃんは何事も無かったかのように改めて別れの挨拶をしてタラップを降りていった。
一人残された俺は空を見上げて静かに思う。
結局チヨに止め刺したの……俺だったな……。
こうしてチヨの勘違いは無事に解消された。

チヨ、心の向こうに

「ただいま～っと」

電気が付いていない真っ暗な部屋に俺の声が響き渡る。

アパートを借りて一人暮らしのため、俺の声に返事を返してくれる存在はない。俺が普段愛用している机や椅子が九十九神だったら返事をしてくれるだろうに、なんて意味の無い事を考えてしまう。

独り暮らしを始めてから思い知ったのだが、真っ暗な家に帰るというのは存外寂しいものなのだ。

「お邪魔します……」

だが、今ここに居るのは俺だけではない。

「はい、いらっしゃい」

俺が先に玄関に入ってから、家主としてチヨを家に迎え入れる。

まほちゃんと俺の関係に関する勘違いに気が付いたチヨは走り去って逃げてしまった。

チヨはその後を追いかけて行ったペパロニとカルパッチョによって確保され俺の前に連れてこられたのだが、あんなことがあったばかりなので俺を真っ直ぐ見られないでいた。

しかし、体は正直なものでチヨのお腹は空腹を報せる声をあげる。

どうやら、ペパロニから話を聞いてから昼飯も食べずに居(お)り、その後の絶叫からの全力疾走のコンボで限界が来たらしい。そこで、ちょうど良いから俺の家で夕飯を食べながらしっかりお話ししてこいとのカルパッチョからのお達しなのだ。

「はぁ～……」

俺が玄関にある部屋の電気のスイッチを順番に着けていくと、チヨはふらふらと部屋の奥に進んでいく。すると、チヨがいつも座る座椅子。に座ると、ぐったりと炬燵に体を預ける。

頬を炬燵の天板にぺったりとくっつけ、両腕は投げ出す。

その様はまさにたれたパンダそのもの。いや、今はぐでっとした卵の方がわかりやすいのか。

さっきからチヨはずっとこんな調子だ。

俺の家に行く途中もどこか上の空で、一人で歩かせたら事故に遭っても不思議では無い位だった。
まあ、仕方ないと言えば仕方ないのか？
「はぁ～……あっ、チョコ……食べていいか？」
「ん？　構わんよ」
たれチヨの視線の先にあったのは、竹で出来た小さな篭の中に積まれたチョコレート。
そのチョコレートはこの間ガレージでチヨにあげた物と同じ物だ。このチョコレートは観光客のお土産としても人気なのだが、アンツィオ高校の生徒の場合は三割引で買うことができる。そして、何より味が良い。そのため、俺はこのチョコレートをよく買って来て常にストックしているのだ。
「……おいしい」
包み紙からチョコレートを取り出して口に含んだチヨは呟く。
甘いものを食べたからか、チヨの浮かべる表情はさっきよりも随分柔らかい。
「よし、チョコを食べたら元気が出てきたぞ！　コータロー！　美味い飯を頼む！」
「任せろ」
どうやら、チョコレートを食べたチヨは調子を大分戻したようだ。さっきまでの暗い雰囲気はなく、何時ものような活発で元気ドゥーチェだ。
さて、頼まれたからにはその期待に応えなければなるまい。
えーっと……何があったかな……。
俺は冷蔵庫と冷蔵保存が必要ない食材を保管しているダンボールの中を確認する。
「パスタしか無ぇ！」
正確には少しの野菜やベーコンの様な肉製品、非常用の缶詰めもあるのだが、これ等の食材から作ることができる料理が俺の脳内レパートリーだと??パスタ的な物しかない。
何より米が無いのが痛い。

最近はパスタばっかり食ってたからこそ起きてしまった事態だ。
安価で手に入り、調理も簡単。加えて長期保存も可能なパスタは男の一人暮らしの強い味方だから、ついそればかりになってしまう。
「アンチョビパスタにするか」
「お、いいね～」
俺の呟きに返すチヨ。
チヨの一番の好物はカルパッチョなのだが、残念ながら材料がない。そこで、チヨがその次位に好きなアンチョビを使ってパスタを作ることにした。
本当はこのアンチョビは保存用の缶詰めの物なのだが、今日はサービスだ。これくらいチヨに優しくしても良いだろう。
うん、本当に。今日はね。
俺の大声告白（後攻）もかなりの人目を集めたが、その後チヨがやらかした走り回りながらの絶叫はそれ以上の人の注目を集めていた。
それはもう、たくさんの人がチヨのその姿を見たことだろう。
でもまあ、この学園艦で暮らす人がそんなチヨの姿を見ても「ああ、またアンツィオ生か」程度にしか思わないだろう。
ここではテンションが上がったアンツィオ生が大騒ぎしたり、走り回ったりするのは日常茶飯事だ。
しかし、チヨの場合はその立場上多くの人に容姿と名前を知られているから「あれ、戦車道チーム隊長の安斎さんじゃない？」ということになるかもしれないな。
「そんじゃま、作業にとりかかりますか。チヨはテレビでも見ながら待っててよ」
「はーい」
俺は料理人の制服たるエプロンを身につけ調理を始める。
一人の時はわざわざエプロンは使ったりしないのは秘密だ。傍に女の子が居ると男はちょっとでも格好つけたくなる物なのだ。
一方のチヨはテレビの電源を入れ、チャンネルを次々と切り換えて今やっている番組を確かめている。そのうち静かだった部屋にニュースキャスターの声が聞こえ始める。

どうやら、特に興味のある番組はやっていなかったようだ。
「コータロー」
「んー？」
パスタに入れる野菜やベーコンを細かく切っていくトントンという音。
名前も知らないキャスターが今日あった出来事を淡々と伝える声。
それらに紛れて消えてしまいそうな程のチヨの声を俺は聞き逃しはしなかった。
「コータローは学外で親しい女友達って、どの位居るんだ？　……てっ、あ！　いや、その、別に、今のはヤンデレ彼女的発想ではなくてな！　純粋に、好奇心でな！」
おそらく自分でも無意識の発言だったのだろう。
そのあまりの質問内容に気が付いたチヨは自分で言い訳をしている。
確かに、普段の俺ならドン引きしているところだが、ついさっき起こった事件……事件？　まあ、事件としておこう。事件があったから、チヨがそんな質問をしてしまうのも無理はないと思う。
今回はいつも冷静なまほちゃんが居たから大事にならずに済んだが、またあんなことになっても面倒だし、ちょっと話して事前に回避できるなら、チヨの質問に答えても良いだろう。
だが、よく考えたらほとんどペパロニのせいの様な気もする。しかし、チヨは恋愛小説が好き過ぎて時々思考がドラマティックになるのも事実。やっぱり予め話しておいた方が良いか？
「そうだな、まずまほちゃんとみほちゃんの西住姉妹は特に仲が良いな」
「ああ……うん。そうだろうな……」
またあの事を思い出してしまったのか、チヨの顔は真っ赤だ。
いじめかっ！　って、言いたくなる顔だ。
「やっぱりというかなんというか、西住みほとも仲が良いんだな」
「あの二人は俺の整備士としての師匠の娘でな、師匠の家に通ってる間に自然と仲良くなってた」

「あー、なるほど」
みほちゃんはまほちゃんの一個下の妹だ。
彼女もかつてはまほちゃんと共に黒森峰学園に通っていたのだが、色々あって今は大洗女子学園に通っている。
そう、大洗女子学園だ！
俺達アンツィオ高校を二回戦で破った相手であり、今年の戦車道大会で見事優勝を納めた学校だ。
みほちゃんはそこの戦車道チームの隊長を努めている。
いやー、みほちゃんの西住流とは違う戦い方は本当にワクワクしたなぁ……と、みほちゃんの戦車道について語り始めたら終わりがないからこの辺にしておこう。
「他には聖グロのダージリンさんとか」
「ダージリン？　何か関わりがあったのか？」
聖（セント）グロリアーナ女学院、通称聖グロは神奈川県に所在する高校だ。
イギリスに縁のある名門のお嬢様学校であり、その教育内容は多才で気品ある淑女を養成することに特化している。
在校生の気質がアンツィオ生と真逆とよく対比されることがある。
「あれは一年の夏休み、一番美味い紅茶を求めて日本中の紅茶屋を巡っていたときのことだ」
「そういえばそんなこともしてたな」
俺が一番好きなことは戦車を弄ることであるが、それには満たないものの趣味と言えるものがいくつかある。
イヤホンやプレイヤーにこだわって音楽を聴いてみたり、最高の睡眠を求めて抱き枕にこだわってみたり、友人から貰ったお古のカメラを契機に写真撮影にはまったり等々。
そんな数々の趣味の一つが紅茶を嗜むことなのだ。
そもそも高校生になったら日本の各地に旅行してみたいと思っていたのだが、ただ単に理由もなく各地を歩き回るのは結構辛いものがある。
そこで、俺は美味い紅茶を探すという目的を持って、評判の良い紅茶屋を巡る旅に出たというわけだ。

「神奈川で一番評判の良い茶屋に行ったらそこでダージリンさんを見つけてな、気が付いたらサインをねだってた」
「その情景がありありと思い浮かぶな」
　ところで、聖グロ戦車道チームではいずれも紅茶にちなんだニックネームを持つ生徒が居る。
　これらの名前は、幹部クラスおよび将来を期待された候補生にのみ与えられるものである。
　当時、ダージリンさんは一年生であるが中学生時代から戦車道で活躍しており、将来を期待されていた彼女は一年生にもかかわらずダージリンのニックネームを与えられていた。
　戦車道ファンにとって有名人にも等しい人がそこに居たら、サインを貰いたくなるのは致し方のないことである。
「その後色々話してメル友になったんだ。最近ではお互いのお勧めの茶葉とか紅茶に合うお菓子の情報をやりとりしてるな」
「私より淑女みたいで何か複雑なんだが」
「そうか？　いやー、照れるね～」
　俺が女に生まれてたらお茶会のためだけに聖グロに行ってたかもしれない。
「後はそうだな、サンダースのアリサさんとか、プラウダのノンナさんとか」
「サンダースの副隊長の参謀の方とプラウダの副隊長だな」
　簡単に説明するとサンダース大付属高校はアメリカと関連性が深い学校であり、プラウダ高校はソ連と関係の深い女子校である。
　両校とも戦車道が非常に盛んで、戦車保有数が日本一、二の学校なのだ。戦車保有数の関係で日本において５０ｖｓ５０の試合を行うことができる高校はこの二校のみであり、時々行われる５０ｖｓ５０の試合はまさに圧巻である。
　俺も何度か見に行ったことがある。
　めっちゃ興奮した（小並感）
　ちなみに、その二人との出会いは秋葉原でのことだった。
　二年の夏休み、当時使っていたポータブルアンプのアップグレード

のためにオペアンプを求めて秋葉の町をさ迷っていた。そこでふらっと入った無線機器やパーツを取り扱っている店でアリサさんに会ったのだ。
アリサさんはサンダース戦車道チームの副隊長を務め、作戦立案を行っている。
彼女は勝つためならルールの範囲内であれば何でもやるタイプであり、彼女の立てる作戦は有り体に言ってしまえばいやらしい。
しかし、戦いにおいてそれは悪いことではない。外から見てる俺ですらそう思うのだから、実際に対戦している相手は相当やりづらいはずだ。
この事からも彼女の参謀としての有能さが窺える。
当然サインも貰った。
ノンナさんに会ったのも同じ日だ。
場所は秋葉が誇る超大型家電量販店のカメラブース。
彼女は女性にしては長身なので、人が多い場所でもすぐに見つけることができた。
当然、俺は彼女に話しかけた。サインを貰うために。
ノンナさんの砲手としての腕はとてつもないものであり、その腕前は大学選抜レベル。いや、社会人チームの中でもやっていける程だろう。
そんなすごい選手に会えたらサインが欲しくなるのは仕方ない。仕方ないったら仕方ない。
アリサさんは機械弄りが趣味だそうで、俺との会話は結構盛り上がった。この間もシャーマンに規格外の通信機器を取り付けるための方法について熱く語り合ったものだ。
ノンナさんは物静かな女性だが、カメラには凄いこだわりがあるらしい。その日は店員の迷惑そうな様子も気にせず、カメラブースの前でカメラについて二時間位議論してた気がする。
なお、議論はそこでは収まらず、今でもメールでお互いの意見をぶつけ合っている。
全ては最高の一枚のために。

二人とも今では大切なメル友だ。
「まあ、そんなもんかなぁ」
「なるほどな～。コータローは顔が広いんだなぁ……、って戦車道関連の人ばっかりじゃないか！」
「当たり前じゃないか。何も知らない女性にホイホイ話し掛けるほど俺は軟派じゃないぞ」
「いや、今の話を聞く限りコータローはかなりの軟派者だぞ」
「なん……だと……」
いつの間にか俺の女性に対する対応がアンツィオ風になっていたのか……。
「でも、話を聞いてなんか納得した」
「ん？　そうか。それなら良かった」
チヨはそう言うとチョコレートを口に含む。
ん？　……ん!?
チヨの奴、俺が置いてたチョコレートを全部食べやがったな！
篭の中には五つのチョコレートを置いていたのだが、今の話しをしている間に中身は全てチヨの腹の中。残っているのは綺麗に畳まれた五枚の包み紙だけだった。
「鼻血出るぞ」
「大丈夫だって」
俺の忠告を気にした様子も見せないチヨに俺は呆れるばかりだ。
チヨがチョコレートを食べるときは、心を落ち着かせたいときだ。
今の間にチヨの心を騒がす何かがあったのか？　それもチョコレート五つも費やすほどの。
そんな疑問を抱きながら、俺はパスタを茹で始める。
ぐつぐつと沸騰する湯に揺られるパスタを眺めていると、チヨが初めて俺の家を訪ねた日の事を思い出した。

見知らぬ、部屋

「安斎さーん、行ける？」
「ちょっ、ちょっと待って。もう少しだから……」
安斎さんはそう言いながら、閉まりそうで閉まらない鞄と悪戦苦闘している。
彼女は学校に持ってきた読み終えた本を一気に持ち帰るために、何冊もの本を鞄に納めようとしている。
どうやら、一冊読んだらその本は学校のロッカーに仕舞い込み、新しい本を家から持ってくるというのを繰り返すうちに結構な量になっていたらしい。
俺はそんな安斎さんを眺めながら、「俺がやろうか？」と、声を掛けるか、彼女の言うようにしばらく待つか、はたまた、入りきらない本を俺が持ってあげた方が良いのかと考えている、という言い訳をしながら結局静観するに留まっている。
だって、下手なことをしてキモがられでもしたら俺は泣く自信があるもの。積極的な行動はしづらい。
「なあ、工太郎って安斎さんと仲良いよな。やっぱりこれなのか？」
俺の後ろに座っている男子生徒が小指を立てながらからかい気味に言ってくる。
「ちげーよ。俺は安斎さんのファンの一人であり、安斎さんとはアンツィオの戦車道を立て直す同志なの」
俺達は安斎さんに会話の内容が聞かれないように声を潜めながら言葉を交わす。
アンツィオ高校に入学してからはや三ヶ月。
クラスメイトとの変な緊張感もとっくに消え、各々気が合う友人達と話したり、放課後遊んだりといった様子がよく見られるようになった。
とは言え、十五歳という多感なお年頃。特に理由がなければ女子は女子とつるむし、男子は男子とつるむ。やはり男女の溝というものは存在する。

決して男女の仲が悪いわけではないし、一般的な共学高校と比較したらアンツィオ高校の校風もあり男女の仲は良い。
そんなアンツィオ高校においても俺と安斎さんの関係は少し異質らしい。
お互いの距離感も掴めない入学直後から俺と彼女がよく話していたのが印象に残っていたのか、クラスメイトからは俺と安斎さんはとても親しく見えるそうだ。
それだけなら別に良いのだが、俺と安斎さんの関係を邪推している人が何人か居るのが問題だ。
俺としては安斎さんのような素晴らしい女性とそういう関係に思われて吝かでもなかったりするのだが、安斎さんに迷惑が掛かってしまうのは良くない。
だから、俺はこの事に関してはきっちりと否定させてもらっている。
「そうなの？　まあ、いいや。じゃ、また明日な」
「おう、じゃあな」
その男子生徒にとって、この話題は大して興味があったわけでは無かったのだろう。
一応の納得をしてさっさと帰ってしまった。
「お待たせ、膝井くん」
そんなこんなしている内に、安斎さんは本を鞄に押し込むことに成功したようだ。
ギチギチに物を詰められて今にも破裂しそうな鞄を辛うじて繋ぎ止めている金具の悲鳴が聞こえてくる気がした。
「ん、じゃあ帰ろうか」
俺は安斎さんと一緒に帰路につく。
だが、今日は自分達の家に帰る訳ではない。
今から二人で俺の家に行って、一週間後に行われる期末テストの試験勉強をするのだ。
安斎さんはアンツィオ高校の女子寮に住んでいる。女子寮は男子立ち入り禁止のため、アパートで一人暮らしをしている俺の家でやる

ことになった。
一緒に勉強するだけなら図書館の会議ブースや学校の教室でやれば良いと思うだろうが、テスト前は追い込まれたアンツィオ生で溢れている。そんな場所では集中出来ない。
そもそも、何故みんなテストに必死になっているのか。アンツィオ高校の事を少し知っている人ならきっと驚くだろう。「え？　テスト期間中もノリと勢いで過ごして文字通りの実力テスト状態じゃないの？」って、思っていることだろう。
甘い。甘過ぎる。
アンツィオ高校ではテストで三十点未満を取ってしまうと、その科目に関する一週間の補習と追試を受ける必要がある。
中間テストで補習に引っ掛かった場合はテスト明けの放課後に一週間＋一日の補習と追試が行われる。
だが、期末テストで補習に引っ掛かってしまうと夏休みの間に一週間＋一日に加えて強制夏期講習を履修させられるのだ！
先輩達の話によると補習と夏期講習で一日が終わってしまうらしい。
ノリと勢いに身を任せ、自分の気持ちに素直な生徒達がそんな面倒な事をやりたいと思うはずがない。
そうすると、自分達にとって一番良いのは結局勉強する事なのである。
とにかく、アンツィオ高校の学生は以外と真面目……ま、まじ……真面目なのだ……うん……。
普段からしっかり勉強しなさいと言うのは駄目だ。その言葉はアンツィオ生に効く。やめてくれ。
さて、これでアンツィオ生が勉強をよくするのは分かったと思うが、それなら一人ですれば良いと思ったことだろう。
俺もそう思ってた。
その結果が安斎さんの中間テストでの補習と追試である。
補習に引っ掛かっると、放課後が使えなくなる。そうすると自然と放課後に行う戦車道の練習が出来なくなる。

俺は補習は無いのだから安斎さんは置いておいて、一人で戦車を置いているガレージに行けば良いと思うだろう。残念ながらそう言うわけにはいかないのだ。
言うまでもないだろうが、俺は整備士である。
そんな俺が必要になるのは主に戦車が使われた後、つまり、練習の後なのだ。
だが、今の三年生は安斎さんにアンツィオ高校に伝わる技能を継承させるため以外には燃料代がもったいないと言って練習をしないのだ。
それは彼女達が怠惰だからではない。
学園長にスカウトされた俺達のために、いや、これからのアンツィオ高校戦車道チームのために練習した時に発生する燃料・弾薬代をイタリア製重戦車Ｐ４０を購入するための資金に、充てているのだ。
先輩達には本当に頭が下がる。
もちろん、日々の保守点検も整備士の大事な仕事ではあるが、それは大した作業ではないのですぐに終わる。
つまり、安斎さんが戦車道の練習に来ないと俺も仕事にならないのだ。
「お、着いた着いた」
と、そんな事をつらつらと考えていたら、いつの間にか俺が借りているアパートの前まで来ていた。
「ここの１０２号室が俺の部屋」
「そ、そうなんだ」
緊張した様子で返事をする安斎さん。
出会って三ヶ月程度の男の家に上がろうと言うのだ。緊張して当然だろう。
かくいう俺も実はかなり緊張している。
何て言ったって、自分の部屋に女の子を入れると言うのは初めての経験なのだ。何か落ち度があれば一気に嫌われる危険がある。
えーと、部屋は普段から綺麗にしているし、ゴミは溜めずに毎回捨てているし、ちょっとエッチな漫画は世界の戦車特集の奥にしまって

いる。
よし、大丈夫なはずだ。
俺は家の鍵を開け、安斎さんを迎える。
「どうぞ。余りキレイじゃないかもだけど、許してね」
「お邪魔します」
安斎さんはおずおずと扉をくぐり玄関に入る。
そして、靴を脱いで、出船の状態に直してピッタリと揃えている。
安斎さんにとっては初めて来た人の部屋なので、俺が先に奥に行ってから彼女に入ってくるように促す。
リビングは九畳。
置いてあるものはベッド、テレビ、テーブルとしての機能のみを果たす炬燵と座椅子、勉強机、教科書や趣味関連の書籍を納めたカラーボックス、その他小物が少々。
衣服はケースに容れて押入れに突っ込んでいる。
我ながら、至極一般的な学生な部屋なのではなかろうか。
「……」
安斎さんはなにも言わずにきょろきょろと部屋を見回している。
おそらく、余り散らかった部屋ではなくて安心したのだろう。
おっと
「どうぞ、座って」
「あっ、うん」
普段は俺が座っている座椅子に手を向けて、安斎さんに座ってもらう。俺は座布団を押入れから取り出し、安斎さんの対面に座る。
よし、この選択は間違ってないはずだ。
だが、安斎さんは座椅子に座りながらももじもじとしている。
トイレか？　等というデリカシーを欠いた質問をするほど鈍感ではない。
やはりまだ男の部屋というのに落ち着かないのだろう。
ここはホストである俺が何とかしなければ！
然り気無く辺りを見回して何か良いものはないかと探してみる。
お、目の前に良いものが有るじゃないか。

「チョコレートでもどうだい？」
「え？　うん、いただきます」
　炬燵の上に置いてあるチョコレートを容れた篭から一つ取り、安斎さんに渡す。
　ここで重要なのはゲストである安斎さんが気軽に食べられるようにホストである俺が先に手をつけることだ。
　俺がチョコレートを食べるのにつられたのか、安斎さんもチョコレートを口に含む。
「……おいしい」
「そいつは良かった」
　安斎さんの表情も幾らか柔らかくなり、大分気もほぐれたのだろう。
　さて、それでは本題に入ろうか。
「早速だけど、中間テストでの各教科の点数を教えて貰えるかな？」
「やっぱり……言わなきゃだめかな？」
　上目遣いでこちらを見てくる安斎さんの力は絶大で、無理に言わなくても良いよぉ～、なんて言いたくなる。しかし、俺は心を鬼にしなければならないのだ。
「駄目です」
「うぅ……」
　やはり、テスト勉強のためにはその人の傾向を知る必要がある。
　出来る所をどれだけ勉強したって点数は伸びないし、出来ないものから逃げ続けてもやはり点数は伸びない。
　確実に点数を伸ばして三十点を取るためには必要な事なのだ。
「えっと、英語６７、現代文９４、古文９８、日本史７８」
「おー、かなり良い成績だな」
　今回の英語はまだ授業でやってない範囲が出されてしまい、軒並み点数が低かったため６７でも高得点だ。
　現代文・古文に関しては俺が教えてもらわなきゃならないな。
「化学２４」
「そうかー。でもそれならちょっと頑張れば何とかなるな」

これくらい想定内だ。
そうなると、安斎さんが今回力を入れないといけないのは化学ってことになるのかな。
「物理１２、数学……４……」
「……何て言うか、安斎さんってすっごい文系ですね」
驚いた。
それはもう、久しく安斎さんには使っていなかった丁寧語が出るくらいには驚いた。
偏りすぎだろ……。
もしかしたら理系科目は語句の穴埋め問題しか出来て無いんじゃなかろうか。
「本を読むのが好きだから文章には強いんだけど、数字はちょっと……」
「そうみたいだね」
人には向き不向きと言うものがある。
それの一つとして文系理系の区別は良い例だろう。
しかし、先生とて意地悪ではない。定期テストで三十点というのはどれだけその科目が苦手だろうと誰でも取ることが出来るように設定されているものだ。
いくら安斎さんが数字に対して異様に弱くてもこれからみっちり仕込めばなんとでもなるはずだ！
「よし！　まずは時間が掛かりそうな数学物理から……」
くぅぅ……
敢えて文字に起こすとしたらこんな感じだろうか。
その音が何なのかということは俺も分かる。しかし、こんなに可愛らしい音は聞いたことがない。
この音と比べたら俺のは地響きみたいなものだ。
「……」
手でお腹を押さえて顔を俯かせる安斎さん。
俯かせた顔は耳まで真っ赤だ。
彼女がお腹を押さえているのはお腹が痛いからかな？

まあ、違うよな。
「その前に軽く何か食べるか。パスタしかないからパスタで良いかな？」
「そ、そんな……悪いよ。そこまでしてもらうわけには……」
「まあまあ。悲しい一人暮らしの男子生徒を元気付けるためにも一緒に食べてよ」
「それじゃあ……ごちそうになります」
「うむうむ」
俺はよっこらせと呟きながら立ち上がり、キッチンへ軽食を作りに向かった。
こうしてパスタを食べた後、俺達の勉強会は始まった。

期末テストが始まるまでの一週間。二人でみっちり勉強したし、人に教えるのは苦手な俺も安斎さんに出来るだけのことをしたつもりだ。
これでもう何も怖くない！

夏休み、俺は一週間＋一日の暇な時間が出来たため、いつかやろうと思っていた旅に出ることにした。
次は二週間前から対策しよう。

☆

さっきまでアンチョビパスタが載っていた皿は食器用洗剤と水によってピカピカに輝いている。
他にも、フォーク、コップ、フライパンも同じように洗っては水切りかごに静かに並べていく。

「後片付けしゅーりょーっと」
俺は濡れた手をタオルで拭き取り、身に付けていたエプロンを取り外す。
冷凍庫から小さめのカップアイスを二つ取り出し、スプーンも二つ用意してリビングに持っていく。
「チョー、デザートにアイス食うか？」
俺の呼び掛けにチョは答えない。
その理由はすぐに分かった。
「寝てやがる……」
それもがっつりと。俺のベッドで。
「おーい、食ってすぐ寝ると牛になるぞー」
俺がそう言ってもチョは起きる様子を全く見せない。
本気寝である。
「スヤァって文字がこれ程似合う寝顔が有るだろうか、いやない」
かつてチョに教えてもらった反語表現でチョの寝顔を表現してみちゃったり。
……じっと見てたら鼻にピーナッツ詰めたくなって来る寝顔だな。
俺は必要なくなったアイスとスプーンを全て元にあった場所に戻すことにした。
俺だけ食べても良いが、それは味気ない。

チョが自分で起きなければ女子寮の門限の一時間前位に起こしてやるか。
そうと決めたら俺はチョを起こさないように静かに戦車大全でも眺めてニヤニヤすることにしよう。
カラーボックスから一冊の本を選び、座椅子に腰を掛ける。